関西大学学術リポジトリ
Kansai University Institutional Repository

ソヴェト・ロシアの地理的性格

著者	宇田 米夫
雑誌名	關西大學經済論集
巻	3
号	3
ページ	76-94
発行年	1953-10-31
その他のタイトル	The Geographical Character of Soviet Union
URL	http://hdl.handle.net/10112/15832

ソヴェト・ロシアの地理的性格

宇田米夫

一

ソヴェト連邦の最も顕著な地理的特徴といえば、何をおいても、――南極大陸を除いて世界陸地総面積の1/6を占めている――その尨大な国土をあげなければならない。試みにその東西ならびに南北の最大距離をみると、ヨーロッパ・ロシアの西端カリニングラードからベーリング海峡につき出た岬に至る長さが七千マイル、北氷洋岸からアフガニスタン国境に至るそれが三千マイルに達する。国土の位置は北緯三度ないし七七度四四分にわたり、その面積八五〇万方マイルはアメリカの約三倍、日本の六十倍にひとしい。かかる廣大な国土が主として気候的制約の多い北方に位いしているという簡単明瞭な地理的条件のうちに、ソ連の国民心理と経済構造にたいして深甚な影響を与える所の環境要因の契機が伏在していると考えられる。ロシアのように連続した大陸塊、しかもあらゆる自然的障害と経済的機会とを同時に内包する尨大な生活空間を支配しようとする場合、そこにまずもつて要求されるものは、強力な求心性を発揮し得る政治機構であることは一つの地理的必然といえるのではないであろうか。また、見透しのつかない程廣大な地域に散慢的に隔在する諸種の資源を何らか効果的に開発利用しようとすれば、限りある資材・労働力を――一定の社会目標に照広して――重点的、集中的に配置する計画経済がとりわけ切実に要請され

ることも当然といわなければならないであろう。現在のソ連邦における社会主義体制の確立は、一方においてロシアの特殊な歴史的社会的事情によることは勿論であるが、他方人類の生産・交通上における技術的可能性の進展を媒介として顕現したところのロシアのユニークな地理的環境条件にもよる所があり、両者合成の帰結を示すものとみることができるのである。人類の活動が或る程度まで地理的要因によつて支配されるということは普遍的な事実である。この見地に立つて、私はソ連邦の有する自然的構造の特質を明らかにするとともに、そのロシア社会にたいする意義或いは影響を考察するであろう。

ソ連の土地の尨大性は、そのなかに包含される地理的条件の多様性を想わせるに十分であり、実際またその通りである。簡単な地域区分の方法によれば、ロシアの国土の大部分は温帯（この場合この用語は内容的吟味を要するが）、一六％が寒帯、四％が亜熱帯に属する。したがつて同じロシアの国内でも、例えば北氷洋に近い地方は馴鹿の飼育に適するきわめて寒冷な気候をもつているが、南方のコーカサスは茶・オレンジのような植物の生育に適した亜熱帯性気候をもつている。また、蜿々として涯てなく拡がる平原性地形はロシアの根本的な地理的特徴には相違ないけれども、しかも中央アジアには「世界の屋根」と称されるパミール高原、天山山系等が連らなり、そのなかには海抜二万五千フイートの峻嶺もそびえているといつた有様である。一方に乾燥炎熱の沙漠あれば、他方に冷涼多湿の沼沢他帯もあるというように自然的条件の多様性は挙げれば限りがないけれども、このことは全体としてロシアの地理に見出される若干の重要な等質性の存在を否定するものではないのである。私は以下において、ソヴェト・ロシアの地域構造の特質をユーラジア性・大陸性・平原性・乾燥性・北方性・封鎖性・自給性等の諸概念によつて規定し、これらの特徴との関連においてロシアの国民心理ならびに社会経済の在り方に言及したいとおもう。

二

過去及び現在において、ウラル山脈を境としてロシアを欧羅巴ロシアと亜細亜ロシアとに区別することが一般の慣わしとなつている。単に位置を示す便宜上のものとすれば別であるが、この区別を強調することは地理学的にも歴史的にも妥当とすることができない。なぜならば、ウラルは自然的境界ないし障壁としての分離的機能を果たしていないからである。先史及び歴史時代を通じ、アジアの諸民族はしばしばウラルの南を通過してヨーロッパに侵入している。降つて十七世紀中葉、コザックを先鋒とするロシアの植民的発展は、ウラルを越えてシベリアに進出、ついに太平洋岸に達し、更に二世紀後には、天山山麓に達したのである。一八九一年開通したシベリア横断鉄道は高度六〇〇メートルにおいてウラルのスウェルドロフスクを通過している。また、山脈の東西両側にある平原は、地質学的にも、植物景観からいつても類似した性質をもつている。ソヴェトになつてから、工業生産力の東方拡張計画が実施され、ウラルの鉄鉱等はシベリアの石炭と結びつけられており、同じような関係はウラルと欧羅巴ロシアとの間にもみられる。かようにして、ウラル山脈は欧亜両ロシアを分離するというよりもむしろ両者の紐帯とみらべるきものである。

今日、西はカルパチア山脈から東は太平洋、北は北氷洋から南は中央アジアの山岳地帯にわたるユーラジアの一大陸塊がロシア人の生活圏となつているのは、かれらの堅忍かつ野心的な努力によるとはいえ、その基礎をなすものは連続的な平原性地形であることは疑いをいれない。すでに十二、三世紀における蒙古民族の大帝国、元の盛時には、極東から黒海ないしアドリア海沿岸にわたる広大な地域に一つの政治的安定勢力が確立されておつた。かようにユーラジアは歴史的に一つの地域単位を形成してきているのである。このユーラジアの地理的背景のもとに、

ロシア人民の文化様式と生活感情にはユーラジア性とも名づくべき特有な性格が形成されている。それは第一に平原性環境の感化力に負うものであり、この種の心理的特質は北ドイツ・ポーランドの諸平原にはじまるユーラジアの大平原に居住する幾多の民族に共通した現象であるが、ロシア人はこれを代表しているのである。第二に、欧羅巴人種の系統に属するロシア人は近世における帝政国家の勃興に至るまで数世紀間、蒙古人・タタール人等の支配下に置かれ、これらの遊牧民族との間に血縁的関係が深くなつた同時に生活様式もかなりその影響をうけている。かのコザックの生活などはその適例である。第三に、ロシアは文化史的にはビザンチン文化の修正された形での継承者であり（ロシヤ文字はシルリア・アルファベットである）、九、十世紀における東ローマ帝国の最盛期にギリシヤ正統教会に改宗したのである。当時コンスタンチノープルは西洋文化の中心であつたから、ユーラジアは西欧羅巴と文化的に共通な基盤の上に立つていたわけである。しかしながら、後に羅馬教会と東方教会の分裂の結果として前者の流れをくむ西ヨーロッパ文化と後者の系統をひくロシア文化との間に異質化の端緒があらわれ、時代とともに両者の乖離は深くなつて行つた。元来、西欧羅巴文化はすぐれて海洋性の地理的環境のもとに発達したものである。地中海沿岸に存立した古代の諸都市国家にとつて航海と商業貿易は至上命令にひとしいものであつた。これが更に発展して新大陸への植民活動となつたのは自然の径路であつた。庶民政治としてのデモクラシーも発生的には都市生活を基調としていた。しかるに、これとは対蹠的な性質をもつユーラジアの地理的環境においては、農耕・牧畜・狩猟を生業として、点々散在する村落共同体が社会生活の基調であつた。そしてロシアの村落共同体すなわちミール Mir の最も重要な機能の一つは村落の各戸にたいする耕地の公平かつ平等な配分にあつた。一農家の耕作地が地味を異にする数十筆の小農圃から成り立つていた、というような事実はミールがいかに平等の原則を重要視した

かを物語つている。このようなミールの共同体的性格は現在の集団農業形態であるコルホーズの基底をなすものである、とみる学者もある。(註) ユーラジアの地理的環境は西ヨーロッパ諸国民の意味するような個人意識と自由をあまり要求しない所のロシア国民性をつくり上げる上にあづかつて力があつた。事実、ルネサンスと宗教改革はロシア人の生活体験にはいらなかつたのである。アンドレ・ジーグフリードは近著「諸民族の性格」のなかで、ロシアの国民心理はアジア化された欧羅巴というよりも、むしろヨーロッパ化された亜細亜的な性格であると述べている。しかし、この点は論者によつて見解のわかれる所であろう。このユーラジア性の分析に立入ることは本稿の目的ではないから、ここにはそれが単なる西ヨーロッパ型或いはアジア型の文化と性質を異にする所以を指摘することにとどめておきたい。いづれにせよ、現時のソヴェト連邦においては欧亜両人種間の人種的偏見と差別待遇は名実共になくなつており、このことはユーラジア性のもつ最も大きな歴史的意義の一つと認めなければならないであろう。

（註） Maynard, Sir John : Russia in Flux (1941)

三

ソヴェト連邦の地域構造、或いはその自然と社会との関連のなかに、地理的秩序をみようとする私は、まずその物理的環境として地形・気候、つぎに生物的環境として植生について述べ、この両者を基礎としてこれらにたいする人間社会の反応の仕方を考察することにしよう。ロシアの地形特色が平原性にあることは前に述べたが、その平原の大部分はイエニセイ河以西の低地から成り立つている。イエニセイ以東は起伏六〇〇乃至一、〇〇〇フィートの台地性平原となり、また中央アジアのツラン平原も――カスピ海附近の海面以下の低地帯は例外として――平均

海抜数千フィートの台地ではあるが、これらは平原全体の比較的小部分にあたつている。ロシアの大平原はこれを三つの部分にわけることができる。第一に、東ヨーロッパ平原はウラル山脈以西、カルパチア山脈に至る部分で、ポーランド及び北ドイツ平原に連らなつている。第二に、ウラル山脈とイエニセイ河の間にある西部シベリア平原は南方、中央アジアのツラン平原と接続し、両者のなかにカザクスタン台地が介在する。第三に、イエニセイ以東は、イエニセイ・レナ両河の間にある中部シベリア台地と、レナ河以東の東部シベリア台地にわかれる。しかしながら、右の東ヨーロッパ、西部シベリア、ツランの各平原はウラル山脈の南において一つに相連なつているのである。

東ヨーロッパ平原の中部及び西北部は地質時代における氷河の前進と後退のため侵蝕され、氷蝕による堆積物がひろく分布している。その最も著しいものは欧羅巴ロシアの河川の分水界をなすヴァルダイ丘陵である。しかし氷蝕限界以南の平原には、風によつて運搬された黄土（レス）がオカ（ヴォルガ上流）・ドネプル等の河谷に堆積し、ロシアの最も重要な農業地域となつている。氷河期の後におこつた海水浸出のためバルト海が、北氷洋と連らなり、ラドガ湖、オネガ湖等が海峡の一部となつていた時期がある。カスピ海も黒海と続いていたが、海水減退の過程において、ヴォルガ下流域に砂・粘土を堆積した。また西部シベリア平原の北部も氷蝕の跡がみられるが、氷蝕をうけなかつた南部は砂・粘土から成り、南方のツラン平原はおもに沖積土と水成岩によつて沙漠が形成されている。イエニセイ河以東の台地は後に述べるようなはげしい北方性・大陸性気候のため、人口稀少にして殆ど未開発の地域である。

ロシアの大陸性気候は、その位置がユーラジア陸塊の規模が極大に達する部分にあたり、大西洋の海洋性緩和作用の及ぶ範囲が限られているためである。その結果、夏と冬の気温較差が大であり、降水量も一般に少ない。しかし、この大陸性気候も、例えば東部シベリアは冬季非常に低温ではあるが、降雪は少なく、中央アジアにおいては夏

の暑熱がはげしく、かつ乾燥するというように地域的差異を示している。極北の寒冷気団――湿度が低い――は東西に走る山岳障壁がないため、ロシア平原の大部分に冷めたい風を送るとともに、他方インド洋の暖かい気流――湿度が高い――は山岳地帯によつて遮断され、内陸に達し得ない。これがひろくロシア平原の、とりわけ中央アジアのツラン平原の乾燥する所以である。バルト海を介して進入する海洋性の影響はロシアの西から東に向うにしたがつて漸減し、最暖月と最寒月の平均気温の差は、ロシアの西境では七〇度（華氏）、ウラル山間では九五度、イエニセイ河畔では一一五度となり、東部シベリアのヴェルホヤンスクでは一五〇度に達する。降水量も西から東、或いは南東に向うにつれて漸減し、ドネプル上流の二六インチを年降水量の最高として、カスピ海沿岸の低地では八インチに低下する。北方の大陸性高気圧帯は冬季、北緯五〇度位いまで拡大し、大西洋の影響は著しく減殺される。しかし、夏季は大体において、ロシアの西部は比較的に海洋性、北部は冷涼にして多湿、南部は高度の乾燥性となる。この時季には、東部シベリアは低気圧帯によつて交代され、アムール河流域及び沿海地方は東亜型のモンスーン気候を呈するが、それは地勢の関係で沿岸地帯に限られている。同様に部分的ではあるが、クリミア半島の南部とトランス・コーカサスは北方からの寒風が山岳によつて防がれるため、冬季も気候温暖であり、特に前者はソヴェトの保養地として知られている。要するに、大陸性気候はウラル以東において特に強くあらわれ、夏季の気温はツラン平原において最高に達する。中央アジア全般にわたつて最寒月の平均気温は氷点を割るけれども、山岳地帯のほかは雨雪が少なく、年降水量はわずか四―一〇インチにすぎない。ここに大陸性に包攝される要素としての乾燥性を特に重要視しなければならない理由があるのである。

ソ連邦学界の権威故ベルグ博士 L. S. Berg は「ソ連邦の自然的諸地域」において、ロシアを低地部すなわち平

原と山岳部とに分け、前者をツンドラ・溫帶林・森林ステップ・ステップ・半沙漠・沙漠・亜熱帶林の七つの植生区域に分けている。そしてかれは更らに溫帶林をタイガ（針葉林）・混合林・廣葉林の三つに分類している。これらの各植生類型は緯度と平行の形に分布しているわけである。第三紀には、今日のロシア全体に熱帶性ないし亜熱帶性植物が繁茂していたのであるが、氷河期にはそれに適応した植物の再分布が現われ、更らにその後の気候変動の結果、現在の植生分布に改変されたのである。最北方のツンドラは森林がなく、永久的凍土層を有するのが特色である。最暖月の平均気溫は一〇度（攝氏）以下で、河畔に叢生する矮木のほかは、蘚苔が生えているだけである。ツンドラにおける夏季の光線の強さは熱帶にも劣らない位いであるが、低溫と強風のため植物の生長をゆるさないのである。ツンドラの南にある森林地帶はロシア国土の半ば以上を占めているが、土壤は寒冷多湿のため、一般にポドゾール化しており、腐植土層が発達していない。この森林帶のうち、タイガ（針葉林）は欧露北部からウラル山脈を経てシベリアに拡がり、世界森林総面積の$\frac{1}{8}$にあたる。西方からウラルに近づくほど、シベリアに多い樹木の種類がみられ、混合林ないし廣葉林はレニングラード・カザン・キエフを結ぶ楔形に分布している。カザン附近から針葉林が多くなり、シベリアは主もに針葉林であるが、極東のアムール・ウスリー河流域に再び混合林ないし廣葉林が現われる。森林地帶には沼沢、低湿地が多く、それは特に西部シベリアに著しい。タイガは地球上において自然景観の季節的変化の最もはげしい地域である。これは高緯度の大陸性気候のためであるから北方性と称してしかるべきものである。酷寒と長夜のため、植物は生長を休止し、地表は白雪に覆われ、河川・湖沼は欧羅巴ロシアでは三ないし七ヶ月間シベリアでは五ないし九ヶ月間も結氷する。春、日がかなり長くなつても地面は凍つている。五、六月頃ようやく地肌が露われ、川は雪解けのため轟々と流れ出し、草木は新緑によみがえり、百花が一時に咲

き、昆虫がとびまわり、農家は急に忙がしくなる。とおもう間もなく、秋に入り、廣葉樹は紅葉し生物は冬ごもりの生態に移る。犬橇は雪中の交通手段となり、家々の暖爐にはサモワールが湯気を立て、ひとはヴオツカに酔うてわずかに季節の陰鬱を忘れる。しかも零下数十度の寒気にもかかわらず、シベリアでは木材の伐採、炭鉱の稼行がつづけられるのである。

タイガの夏季は短かいながらも日射時間が長いため、案外作物は急速に生長する。例えば、ヤクーツクでは七月の平均気温は一九度（攝氏）に上り、レナ河流域では麦類、水瓜等が栽培される。蒸発が少いから、ヴェルホヤンスクでは年降水量五インチ余しかないけれども、灌漑なしに耕作し得る。前述の沼沢の多いのは氾濫した河水が溜まつたもので、オビ・イエニセイ・レナ等の北流河川は下流の凍結中に水源地帯から雪が融けはじめ、流域に氾濫してなかなか乾かない。もちろん、地中に水が浸透しにくいことも影響する。タイガの経済的意義は木材と並んで毛皮獣の多いことで、毛皮は初期のキエフ公国及びモスクワ公国時代にはロシアの最も重要な富源であつた。針葉林の南の森林ステップ乃至ステップはロシア全面積の一二%にひとしい。森林ステップの土壌は黒色土（チェルノゼム）であり、それはソ連の耕地全体の3%を占めている。チェルノーゼムは黄土（レス）のうえに発達したもので腐植質に富み、かつ乾燥性気候のため植物の営養分となる可溶性鉱物質を多量に含有し、最も農業生産力の高い土壌類型である。ステップの南及び南東にある沙漠地帯はロシアの全面積の一八%を占め、カスピ海東岸とツラン平原はこのなかに含まれる。沙漠地帯は北部の乾燥ステップ（半沙漠）と南部の沙漠とに分けられる。そこでは植生はきわめて疎生または皆無の状態であり、住民は家畜の糞を拾い集めて燃料としている、普通のステップは別として、乾燥ステップは腐植土が少く、したがつて土壌は栗色土となり、カスピ海附近ではかなり塩分を含んでいる。更らに沙漠とな

ると、前述の如く年雨量は平均四インチであり、夏季は日陰でも一二六度（華氏）の高温に達するが、その灰色土壌は灌漑をほどこしさえすれば肥沃な耕地となる可能性をもつている。以上のほか、部分的にはクリミア、コーカサス等の亜熱帯林があり、またソ連の南部国境地帯を縁とる山岳の恒雪線附近にはいわゆる高山植物がみられる。

ソ連邦農業問題に関する専門家ジャスニー Naum Jasny（スタンフォード大学）は、「ソ連邦の社会化農業」の中で、ソ連とアメリカの土壌分布について興味深い比較を試ろみている。いま、アメリカのソールト・レイキ・シティとヴォルガ河口のアストラカンはいづれも年雨量一〇インチの乾燥性気候のもとに、半沙漠ないし沙漠によつて囲まれた位置にある。ところでアメリカでは東方の大西洋岸に進むにつれてみられる土壌の各種類はソ連では北方に向かつて展開されている。土壌分布の序列は1、灰色ステップ土壌　2、栗色土壌　3、チェルノーゼム　4、褐色森林土　5、ポドゾール土となつており、分布の序列はアメリカもソ連もほとんど同じである。しかし、アメリカでは　4の褐色森林土に相当する部分にはチェルノーゼムに続いてプレアリー土が非常に発達し、褐色森林土は比較的せまい範囲を占めている。なぜかといえば、アメリカの土壌型は東西にわたつて縦に配列されるに対して、ソ連は南北にわたり横に配列されているからである。アメリカでは降水量が次第に増加して四〇インチに達するが、ソ連では二六インチで最高となり、年降水量の拡がりはアメリカの約½にしか当らないばかりでなく、気温の著しい低下をともなつている。ソ連の土壌型分布は降水量の緩慢な増加と気温の加速度的低下との合成を示すものである。かようなわけで、アメリカのプレアリー土の上に成立したコーン・ベルトに相当する豊穣な農業地帯はロシアにはみることが出来ない。ロシアの森林土は玉蜀黍には冷めたすぎるため、ライ麦・馬鈴薯・甜菜がおもに栽培されている。また、ソ連におけるポドゾール土の分布はアメリカにくらべてその割合が大きい、とジャスニーは言つ

ている。このような土壌生産力の相違は結局、ロシアのもつ北方性の自然条件のしからしめる所である。

他方において、前述の乾燥性もソ連の農業生産力を著しく制約している。ソヴエト当局の発刊した『農業ソヴエト連邦』（一九三八年）によれば、現在のソ連の可耕地総面積は、国土の約一〇％にあたり、ほかに廣い意味における牧野が国土の一七・八％と推定されている。その他は森林、ツンドラ、沼沢、沙漠、山岳等であり、農耕地として開発利用はほとんど見込がないとみられている。そして可耕地総面積二億三千ヘクタールのうち、カザクスタンだけで――ほかにも乾燥性の土地は多々あるが――四百万ヘクタールを占めているが、その大部分は半沙漠である。しかし、前にのべたように、沙漠でも灌漑地帯は例外的に生産力が高く、ソ連の綿花の九〇％はこうした灌漑地帯、特にウズベク共和国の生産に依存しているのである。最近、綿花の栽培面積は北緯四三度から四七度に拡大され、乾地農法によつて乾燥ステップにひろく試植され、新綿花地帯は綿花作付総面積の1/4に上るが、湿気欠乏のため、その生産高は総生産量の一割に足りないということである。たんに沙漠地帯にかぎらず、ヨーロッパ・ロシアの東南部を中心として、ヴォルガの中下流域・北部コーカサス・黒土帯の核心部、さらにはクリミア・ウクライナの南東部にわたり、旱魃飢饉が間歇的に発生することは周知の通りである。したがつてソ連邦の乾燥性による被害に対する防止策がいかに重大なものであるかは、われわれの想像に余りがある。夏季、沙漠から襲来する熱風防止のため、一九四八年着手された植林計画は全長三千五百マイルに及ぶ大規模なものである。その他、アム・ダリア、シル・ダリア等の水をひく運河の拡張、ヴォルガ流域のダム、更にオビ・イルチシ・イエニセイ各河の水流を利用する大人造湖建設等の一連の計画はいづれも乾燥性の制約を克服せんとするきわめて切実な要求から生まれたものである。もちろん、工業化に要する動力資源の開発目的とも関連しているのはいうまでもない。

現今、地球上において人類の開拓・居住にとつて最も難関と目される土地はアマゾンの如き熱帯原始林と高緯度の北方寒冷地域とされている。後者の代表はいうまでもなくソ連、カナダ両国の北方地域である。農作物中、栽培北限の最も高い大麦・ライ麦さえもアジアでは北緯五〇ないし六〇度が限界とされている。ロシアのツンドラ地帯では住民は主に馴鹿飼育、狩猟、漁撈に依存し、温室による小規模な自給用栽培以外には農業の発展性がないであろう。タイガにおいても、ただ河畔の沖積土の林野に牧野に牧牛が行われ、比較的土壌条件のよい開墾地に耐霜性の作物品種が栽培されているにすぎない。農耕は林業、鉱業、狩猟に対して従属的な地位にある。これに比較すれば、乾燥地帯の農業開発はなお遙かに可能性が大きいわけである。いづれにせよ、耐旱性ないし耐霜性品種の発見ということはソヴェト農業における最も緊要な課題の一つであり、事実、ミチューリン、ルイセンコを先達とする農業生物学の研究と実際の成績は世界の学界に反響をよびおこしている。もしこれがソヴェトの宣伝でないとすれば、かのルイセンコ学説における作物の遺伝と環境の関係についての新しい原理は、人類と地的環境の関係を課題とする地理学にとつてもきわめて価値ある示唆を与えるものであると信ずる。

さて、ヨーロッパ・ロシアの中緯度混合林においては、亜麻と酪農と組み合した農業生産様式が支配的となつている。亜麻は地味を消耗する作物であるから、輪作に牧草を栽培して乳牛を飼うのである。ヴォルガ中流域から黒海沿岸、更に西部シベリアに連らなる森林ステップすなわち黒土帯はソ連の最も重要な小麦生産地帯であつて、このなかにも西部の甜菜、シベリアの牧牛といつた地域的特色がみられる。しかし現在、ソ連邦の穀物供給は黒土帯のみに依存しておらない。小麦の栽培限界はヨーロッパ・ロシアでは従来の北緯五六度から六〇度まで拡大されており、また東部及び南部に向つて拡大されたのである。ステップでは前記の乾地農法による綿花・穀物・牧草の粗

放的耕作か、もしくは牧畜が行われる。ステップ以南の沙漠は――灌漑地帯のほかは――緬羊・山羊・駱駝等の牧畜にしか利用し得ない。クリミア及びコーカサス地方は特殊な気候によつて果樹（オレンジ・葡萄）・茶・煙草・桐油等の栽培に適し、炎暑の中央アジアでは、海抜数千メートルの高地に穀物・果樹（りんご）が栽培されている。東部シベリアでは限られた地域に農耕・牧畜が行われ、極東南部はモンスーン気候のため、米・大豆・甜菜等が主要作物となつている。こうした地域的分化とならんで、大都市及び工業地帯附近の農村には園芸・酪農地帯が成立している。

ソ連の可耕地面積は国土の小さな比率にしか当らず、そのなかにも未開発が少なくないことは前述の如くである。その上、気候条件の制約のためとか、その他の理由に(註)よつて、単位面積当り収量が一般に低いことは事実である。にもかかわらず、総生産量の絶対値は――約二億の総人口を考慮しても――かなり大きい額に達している。これは何といつても国土の尨大性の致す所である。現にライ麦は世界総生産量の三四・三%、大麦二八・〇%、燕麦三四・〇%、馬鈴薯六〇・八%、小麦二六・〇%をそれぞれ占めているのである（チンメルマン著「世界の資源と産業」二〇五頁参照）。

（註）「ノルマ・ノルマで作業量に追われるあまり、質を閑却することで、例えば國營農場（ソフホーズ）の雑草取りにしても、面積だけを問題にするあまり、雑草の根を全然抜き去らないばかりか、雑草のなかにある作物すらも刈取られてしまうことが非常に多い。」

「林檎果樹園についても同様で、剪定も袋被せもやらない。こんなことをやれば、却つて收穫が少く徒らに労力を損するばかりだという。馬鈴薯のごときも種芋を植えつけたまま一度も手入れや草取りをしないで秋まで放置する。したがつて雑草の中にようやく芋を見つける程度で、單位面積では實に粗末な收穫であるが、しかしそれでも面積が廣大であるから……」（西元宗助著「ソヴエトの眞實より」）

五

以上の如く、ロシアの平原はさまざまの生産条件を有するが、地的環境としてはきわめて一律単調である。目のとどくかぎり茫々として涯てない曠野の中で「吐き出したくなるような寂莫」に包まれて生活するとき、そこに特有な心理が習性化するのは当然である。ソ連の平原は余りに廣大であり、大自然の前における人間の微小な存在を一瞬も忘れさせない底のものである。ひとはいわば宇宙的きびしさに打たれざるを得ない。こうした心理はソ連以外の国では自然の規模が小さいか、または人為的環境によつて一広掩われているが、ロシア人には絶えず身について離れない。それは一面、かれらの溫かいホスピタブルな人情として流露するが、同時にプロポーションの観念を鈍くする面もある。ロシア人の食事時間の一定しないこと、止め度もない長話等はその現われである。このような無際限な空間性の感化力が大きければ大きいだけ、それから脱れんとする強い反撥作用が起つてくる。宗教に対するロシア人の本能的な信仰態度、或いは「イズム」に対する熱情的傾倒などはこれを示している。また、宗教典礼・音楽・舞踊等における形式主義もこれと関連しているのであろう。

平原性は祖国ロシアにとつて最も信頼するに足る戦略的価値を保障し、瑞典のグスタフも、仏蘭西のナポレオンも、独逸のヒットラーも平原の奥深く攻めこんだために敗れなければならなかつた。そして大陸性気候はこの平原性を前提としている。寒暑の差のはげしい気候の鍛練はロシア人の特徴である耐久性＝忍従性に最もよくあらわれている。言いかえれば、苦難に対する抵抗力が強く、冷厳な生の現実、運命の薄遇に対しても敢えてたじろがないその生活力は苛烈な大陸性気候に対する馴化 acclimatization の賜物とみることができるであろう。ロシア人の

日常連発する「ニーチェヴォ」の一語はかれらの気質を最も手近に表現するものである。それは東洋的な諦観に相通ずる所もあるが、必ずしも悲観的宿命観的ではなく、むしろ本質において楽観主義的とみられる。沈鬱と激情、服従と反抗、冷酷と親切といつたパラドキシカルな両端の間の幅の廣いことも大陸性の現われとみられるのである。ソヴェト革命前におけるロシアの農民大衆は唯々盲従の不活発な集団でなかつたのは由る所がなければならない。ロシアの農奴制のすがたはしばしば過酷の標本のように描かれており、事実そうであつたかも知れないが、貴族地主は――農奴の種々な身分的差異にかかわらず――かれらを土地に縛つて置くことはできなかつた。住民の数にくらべて土地があまりに廣大で、各領主は耕作し得る以上の土地を所有していたため、自分の所領に一人でも多くの農奴を吸收しようとしていたのである。不満の農民は他の地主に走ることも、森林に逃避することも、或いはコサックの群に投ずることもできたのである。領主たちは農奴の移住を禁ずる法令を定めたが、実際は隣接地方から農奴をひつぱるのが常であつた。かくて農民は奴隷的境遇にありながらも、なお鬱勃たる不平不満のはけ口を見出し得たのであり、このことはロシア農民ひいては国民の性格を理解する上に大切な一面であるであろう。

ところで、ソ連邦の国境線をみれば、全長三万五千マイルの⅔は北方及び東方の海岸線であり、南方は山岳地帯であるため、西方のみが平原につづいている。その海岸線の大部分は北氷洋岸で、バルト海、フィンランド湾、白海及び極東の諸港も凍結の不利をまぬがれない。更にバルト海、黒海、カスピ海等は内海の性質上、外国によつて隘路を制せられるか、或いは出口を全く封じられている。年間を通じ自由に公海に出入し得るのは北大西洋の暖流に洗われるムルマンスク港だけである。ただ、内陸の交通はヴォルガをはじめ多くの河川と運河によつて連絡されている。それ故ここに封鎖性をソ連の地理的特徴に加えることができよう。世界陸地の1/6にもひとしい廣大な土地

が――相対的な意味にもせよ――封鎖的境界によつて囲まれていることは誠に不思議な地理的運命というべきである。この点からもロシアの茫莫なる平原はユーラジアの地域単位を形成するにふさわしいものとなる。

ロシア社会の後進性は、地理的封鎖性との関連において容易に理解し得るであろう。ピョートル大帝が「西欧への窓」としてセント・ペテロブルグ港を帝都にしたのも封鎖性による文化的立遅れの対応療法であつた。ピョートルの西欧化政策は貴族地主の「ロシア髯」を剃ることを命じ、軍隊の装備を改革した。エカテリナ女帝によるこの政策の踏襲は有閑階級に洗錬された教養と煩悶とをもたらしたが、一般人民は文化の下積みとなつて呻吟していた。革命後のソ連においてはトラクターと「科学的管理法」が導入された。形はちがうけれども、これらの場合に共通の特色は中央政府が人民に対して行う強制的指導に存する。一九二八年に二千万以上をかぞえた個人農場は三〇年代における強制的な農業集団化の結果、二十五万の協同農場（コルホーズ）と四千の国営農場（ソフホーズ）に再編成された。前者の平均規模は約千二百ヱーカー、後者は約七千五百ヱーカーとなつている。こうした農業組織の再編成は農村に農業機械を供給し、そこでの過労剰働力を吸収し、かつ国防を強化充実せしめるための工業化の推進と結びつかなければならなかつた。工業化の基礎条件は資源と技術的熟練であるが、前者についてはソヴェトはまさに地大物博である。かくて生産方法の技術的たち遅れは急速に清算され、昨日までの羊飼いが今日はトラクターを操縦し、かつて侮蔑されていた農民の社会的地位はいわば野外工場の熟練工といつたものに向上してきている。しかしながら一般人民は国外の事情に暗らく、その生活並びに知性水準はまだ後進性の域を脱するに至らないごとくである。にもかかわらず、かれらが自信と誇りを持ちつづけているのは封鎖性によると共に、一つには食料及び工業原料の需要を殆んど国内で賄い得る高度の自給自足性による所が少くないのであろう（外国貿易の必要がないというのではない）。各種の鉱物資

源・水力資源の包蔵において、ソ連邦と比肩し得るのは国家としてはアメリカだけである。石炭及び鉄鉱資源はいづれも世界総埋蔵の½を占め、銅、ボーキサイト、石油、鉛、亜鉛、マンガン、錫、金等に至るまで、すべて相当豊富な埋蔵量を保有している。石炭の埋蔵量は一六兆五百四十億トン（一九三七年国際地質学会議）という天文学的数字によつて示され、この九〇％はウラル以東のシベリアに埋蔵されているといわれる。工業化指標の一つとして石炭採掘量と鋼（スチール）の生産量をみると、一九五〇年のソヴェトの採掘量二億五千万トンはアメリカの約½であり、鋼（スチール）の生産量二千五百万トンは約¼ではあるが、問題は将来どの点まで増大するかにあるであろう。上表の示す如く、石炭生産高はドンバス（ウクライナ）が最も多く、クズバス（シベリア）、ウラルがこれに次ぐけれども、埋蔵量としてはクズバスが最大である。炭田が諸地方に分散していることは「その他」の生産数量がこれを示している。

ソ連の地域別石炭生産高（一九五〇年）

ドンバス炭田	八、八〇〇万トン
クズバス炭田	三、一九〇
モスクワ炭田	二、四五〇
ウラル炭田	三、一六〇
カラガンダ炭田	一、五一〇
その他	五、八五〇
合計	二五、〇〇〇

上記のカラガンダ炭田（カザクスタン）の如きは二十数年前は人口数百の一寒村にすぎなかつたが、今は三十万の都市となり、その他マグニトゴルスク（ウラル）、スターリンスク（シベリア）、コンソモルスク（極東）等多数の新興工業都市が国内の諸地方に発生してきている。あたかも南北戦争後、アメリカの西部地方が急速に開発されて行

つた狀況に似た所がある。かようにしてソ連邦の經濟地理はきわめてダイナミックな樣相を帶びているのである。

一九三〇年頃シベリアの石炭、穀物、木材と中央アジアの綿花とを交換するため、トルクシブ鉄道が建設されて以來、その沿線が灌漑化されついで銅、鉛、燐鉱、石油、石炭等の各産地にそれぞれ支線が拡張された結果、中央アジアはソ連の重要な産業地域となつてきている。また欧露最北部のコラ半島についても同樣な変化が現われている。このようにして交通条件の整備は一切の經濟的発展の根本である。ソヴェトの鉄道全長は革命前の三万三千マイルから現在七万三千マイルに達しており、目下鋭意その拡張に努力している。ソ連においては国土の範囲があまりに廣く、原料生産地と消費地が隔在するため、原料あるいは製品の運送費用をいかにして軽減するかは決定的に重大な問題となる。したがつてその工業立地は(註)各地域の風土条件に最も適した特殊部門を建設することを指向するのはいうまでもないが、同時にそれを中核としてできるだけ地方的自給性をもつた經濟地域を形成する方向に持つてゆこうとしている。現行の行政区域である「オブラスト」はこうした經濟的意図を有すると同時に、多くの少数民族に対する自治を考慮して設置されたものである。

平原性地形は鉄道の建設拡張にたいして一見好都合な条件を与えるように思われるが、必ずしもそうでない。第一に地域間の距離が非常に長く、建設資材としてはバラストが非常に不足している。道路の建設は大陸性気候のため、冬季の結氷、雪とけ、気温の激変等によつて生ずる多くの困難な問題をともなつている。そのため自動車交通の発達も甚だしく制約されているのである。ソ連の如き大国における航空路の重要性はきわめて明らかであり、特に他の交通機関のない北方地域においてその意義が大きい。北氷洋の沿岸航路は夏季、ウラジオ・ムルマンスク間に開かれるが、他の季節は航空連絡によるほかはないのである。ソヴェト連邦のポテンシャルな資源はまことに莫

大ではあるが、これを開発利用して人民の福祉と生活水準の向上に資するためには、まずもつて交通上の困難な問題を解決しなければならない。その成効は交通施設の進展の程度に依存するといつても過言ではないであろう。換言すれば、ソヴェト・ロシアの社会経済的発展は平原性・大陸性・北方性・封鎖性等の地理的条件に内在する諸制約をいかに排除克服するかにかかつているのである。

（註）ソヴエトの工業立地には經濟的要因と政治的要因とが考慮されている。前者は、交通條件のゆるすかぎり、原料生産地と消費地に近接したところに工場を設けることである。後者は、西部からの破壞的攻撃にさらされない地方に工業を新設或は移動すること、産業發展の遅れたる地域（例えば中央アジアのような）に工業生産力を培養することに狙いがある。一九三〇年代にマグニトゴルスクの鐵鑛とクズネツクの石炭を結合する總合工業地區（コンビナート）の建設計畫が實行されたが、兩地間の距離一、三〇〇マイルあり、重量貨物の長距離運送のため甚しくコストを高めることがわかり、その計畫は修正された。現在、スターリンスクの重工業はその附近の鐵鑛を原料に使用している。一九三九年黨大會におけるモロトフの報告はこうした政策の轉換を暗示している。「工業は原料生産地と消費地域により近く持つてくるべきである。それは不合理な輸送と異常な距離にまた、がる輸送をなくするに役立つであろう。それはまたソ連の比較的未開發の地域を發展させる手段ともなるであろう。」　Schwartz:Russia'sSoviet Economy (1951) 參照

一九五三年八月三十日稿